

# 浦賀文化

平成19(2007)年10月1日

第12号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀文化センター(郷土資料館)

〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1

TEL&FAX 046-842-4121

## 浦賀港拓道碑

「三崎道の難所に喜笑の声塗に溢れる！」

県道二十一号線、浦賀港久里浜停車場線(通称・浦賀通り)の久比里坂の頂に、市民文化遺産の一つである「浦賀港拓道碑」と久比里坂開鑿記念碑の二つの石碑が建っています。三崎街道の難所を往来する人々の困難を憂え、開削を行った郷土出身の峯島茂兵衛の偉業を伝え、称える石碑です。

江戸時代末期の浦賀と久里浜を結ぶ道は、三崎へも通じる道、三崎街道の難所であった。本来の三崎街道は高坂から吉井に抜ける通称「お林」を通る道であったが、遠回りとなるため、険しくて道幅が狭く(二間、約一・八巴難所でありながら久比里坂を往来することが多かった。

現在の久比里は、久里浜行政区域であるが、江戸時代は西浦賀村の一画であり、昭和十八(一九四三)年に浦賀町が横須賀市と合併するまでは浦賀町久比里であった。しかし、浦賀と久比里の間は一山越さなければならなかった。地域の人々の難渋を見聞きしていた茂兵衛は

とから想われる。また開削により「…砥平となり、擔う者駄す者、載す者、労を転じて逸をなす。喜笑の声塗に溢る。」と記され開削が人々に大きな恩恵を与えたことが読み取れる。この功により、明治五年天皇より褒賞として銀杯を賜っている。この功績を称え建てられたのが「浦賀港拓道碑」である。道の整備、開削には茂兵衛の外にも尽くした人がいるが、故郷を離れていながら事業を成した人はまれといえる。

明治五(一八七二)年に建てられた碑は、大正十二(一九二二)年の関東大震災で倒壊し三分となったが、その碑は三富家に保存されている。現在建っている碑は、茂兵衛の五十回忌に当たる大正十四(一九二五)年十一月に、七代目茂兵衛および世話人衆が後世に伝えるために原寸大で再建、その経緯を裏面に刻んでいる。

開削を決意し、明治三(一八七〇)年十一月、八幡久里浜村の三富権七(茂兵衛の甥)と同村役人、浦賀村の名主の連名で浦賀役所に久比里坂開削の許可を請う文書を提出し、許可を得た。工事は明治四年の春に始まり、同年十一月に完成した。その道路は、長さ四百二十尺(約百二十六m)、幅二間(約三・六m)、約八千人の人々が携わり、費用は全て茂兵衛の私財で賄われた。

久比里坂がいかに険しい道であったかは、「…危険を束ね、頑石萬状、鋸たり、兀たり、拗たり、暑に至り涼、凍雪則ち人畜傷つき弊る」の道に「…と碑に刻まれているこ

この碑の左側にある「久比里坂開鑿記念碑」には、開削事業への感謝と事業を後世に

伝えること、また、当初は坂口に建っていた浦賀港拓道碑を「狭険にして風景なし」と著し、現在の位置に移設明治三十年十一月した経緯を刻んでいる。この碑は関東大震災で根の方にひびが入ったが、倒壊は免れた。

●難解語句解説  
危険(きあひ)を束ね(と)...

●頑石萬状(がんせきばんじょう)...

●兀(ぶつ)...

●拗(おぼ)...

●擔(たん)...

●浦賀港拓道碑

●久比里坂開鑿記念碑

●参考文獻

●東西風

●浦賀文化センター

●久里浜の記念碑と野仏

●幕末から戦後まで

●石井昭著 神奈川新聞社

●横須賀人物往来 改訂版

●辻井善弥ほか著

●横須賀市生涯学習財団

●山本



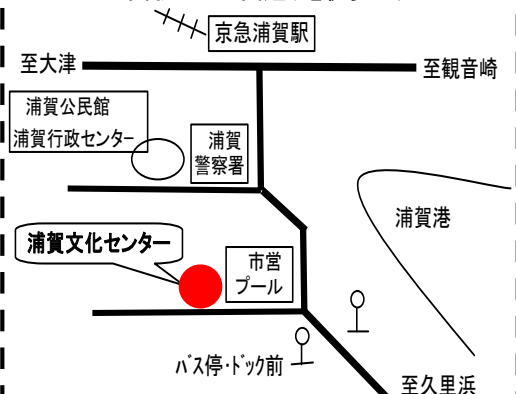
久比里坂を見つめる 右「浦賀港拓道碑」

左「久比里坂開鑿記念碑」

## 浦賀文化センター

(郷土資料館)

浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分



所在地:横須賀市浦賀7-2-1

電話: 046-842-4121

FAX: 046-842-4121

## 東西風

浦賀の人は八月の下旬の頃から、何かをやるうとする。「それはお祭りの後で」とか、「お祭り前にはそれは無理」などと、お祭り(叶神社)を基準に生活のサイクルが生まれ、一年間貯えたエネルギーを発散させる場となっている。そして何より自慢に思っている。

誰しも自分が生まれ育った地域のお祭りが最高だと思ふことから、その地域の歴史・文化を大切に思い、後世にも伝えていきたいと思つている。そのためには地域をよく知り、愛することが必要である。しかし、近年こうした風潮にのるだけで、考えなしに「伝統」を振りかざす人が増えてきている。伝統的だと思つてきたものの多くが、今からそう遠くない時期に、むしろ新しい習俗として作られたものであることが多い。伝統とは「ある」ものでなく、「作られた」ものであるとしたら、伝統とは「なま物」であり、常に新鮮さを保つことが大切なことなのでしょう。

浦賀文化センター(郷土資料館)は、市役所、各行政センター、公民館、浦賀病院、一部の小学校、中学校、高校の図書館などに置いてあります。

浦賀の植物

アオキ アオキ科（ミズキ科）

大前悦宏  
神奈川県植物誌調査員

観音崎や浦賀の山を歩きますとアオキをよく見掛けます。また、庭や公園でも下木として緑を添えていてこれほどありふれた木も珍しいと思います。アオキは日本固有種・特産種であり、分布も中国地方を除く関東以西の本州と四国に見られます。



アオキの雌花  
中央に1つの雌しべ



アオキの雄花・雌しべが4本

アオキはミズキ科と図鑑などにも記されています。しかし、最近の研究(大井哲雄氏)によりアオキは、ヒマラヤ、中国南部、韓国(済州島、鬱陵島)、台湾北端部、そして日本に分布する在来種であり、北海道西南部から沖縄まで広く分布します。アオキは従来ミズキ科とされてきましたが、ミズキとは関係ないことが分かり、APG植物分類体系ではアオキ科、またはガリア科とされました。(アジサイもユキノシタ科でしたが最近アジサイ科に分類されています。)従来のミズキ科は北半球に十族百種分布します(三浦半島に四種)。現在分類されているアオキ科は中国を中心に一科一属約十五種が分布すると記されています。

に滞在しました。ヨーロッパでは数少ない常緑樹ですが、常緑樹アオキに赤い艶のある実がついている姿にいたく感動したと帰国後の彼の著書『異国の魅力』で触れています。一七八三(天明三)年イギリス人のジョングレーバー氏は母国に赤い実をつけた生木(雌株)を持ち帰り楽しんだが、翌年は残念ながら実を結ばなかった。それ以後、深い緑の葉を愛で観葉植物として挿し木で増やし楽しむだけの年月でしたが、約八十年後の一八六〇(万延元)年プラントハンター、ロバート・フォーチュンが英国軍艦マルモラで来日。長崎を経由し横浜に到着しました。彼は、神奈川県のある農家でアオキの雄

株を見付け、鬼の首を取ったような喜びようでした。すぐにこの雄株は丈夫な木箱に土を入れ植え込み本国へ送ったと、彼の著『江戸と北京』に詳しく述べられています。雌株だけを愛培していたヨーロッパ園芸界は雄株が当時高価な値で取引されたといわれます。今では観賞用として世界各地で広く栽培されています。アオキは普通の木のように樹皮が褐色にならず、年中葉も幹も青いことからの名で、ラテン語学名アウクバは日本名アオキバ青木葉に由来します。ヨーロッパでは一般名で aucuba と呼ばれています。

民間薬などで、やけど、腫れ物、利尿、脚気、浮腫、膀胱カタル、しもやけなどに利用されます。

と(アオキ青木)には、次のような有名なエピソードがあります。ヨーロッパに初めてアオキを紹介したのは一六九〇(元禄三)年に来日したケンペル。彼は二年間日本

—平成19年 夏 浦賀—



関東大震災受難者と水難者慰霊法要



引揚船関連戦病死者慰霊法要



厳かな奉納舞

【お知らせ】  
平成十九年度の歴史講座は十一月十四日から十二月十二日までの各水曜日に開催を予定しています。応募方法等詳細は公民館ニュース、市の広報などでお知らせいたします。ご期待下さい。

子どもたちで賑わった浦賀プールも、鳥の水飲み場となり、文化センターの周りもすっかり秋模様です。と同時に私も還暦を迎えることになりました。ご存じのことと思いますが、「還暦」とは十十二支で六十通りの組合せがあり、六十年で一回りして生まれた年の干支に還ることから「還暦」と言うようになり、赤ちゃんに還るという意味と魔除けの色とされている赤い物が贈られるようになりました。西洋では六十歳の誕生日にダイヤモンドを贈るそうですが、できることなら赤いチャンチャンコよりこっちにしてみたいものです。ベビーブームに生まれ、入試に就職、団塊の世代と呼ばれ、適当に生きてきました。この先どうなることやら。

笑話一題



歴史 語り座・浦賀 ⑫

郷土史家 山本 詔一

頭巾膏と台場の掃除

東浦賀の大ヶ谷に柴崎という膏薬を製造販売している店があった。大正四年に刊行された「浦賀案内記」には萬能膏本舗と紹介されている。私が以前お年寄から聞き取りをしたときには「ムカデ膏」という、はまぐりの貝に入れて売っていたと膏薬のことを聞いたことがある。またムカデを捕まえて持つていくと買取ってくれたということであった。江戸後期に刊行された「近世浦賀崎人傳」にも柴崎は紹介されている。柴崎は名を伊助といい、若いころには遊郭を経営していたが、次第に衰退し、ついには浦賀に居られなくなつて、江戸へ出た。しかし、江戸で悪い病気に冒されて、こまでの命と思つた時に、悔いのないように暴飲・暴食したが、これが毒をもつて毒を制する結果となつた。

その願ひとは、『私も先代から「頭巾膏」という膏薬を浦賀港へ出入りする廻船へ売り、日増しに繁昌しているのは、ここに船の関所(船番所)があるからです。ついでには浦賀奉行所に何かご恩返しをと思え、港口にある千代ヶ崎台場の掃除をさせては下さいませんか』というものであった。

こうして病を克服した柴崎は、故郷浦賀で役に立つ仕事をしたいと一念発起し、家に伝わっていた膏薬を製錬し直し、近隣の打ち身や切り傷など怪我をした人に塗つてあげたら、その効き目はすこぶるよく、譲つて欲しい、売つて欲しいという声が目増しに大きくなつていった。

本格的に膏薬の製造販売を始めたのは、寛延年間とあるので一七四八

浦賀案内記 発刊の協賛広告  
萬能鎧膏 本舗  
柴崎 金八  
浦賀町大ヶ谷四十番地  
振替口座東京二一七五五番



頭巾膏と呼ばれた萬能鎧膏本舗があった東浦賀新町バス停付近